

あとがき

「奈良の伝統工芸について書いてくれないか、ほんの数回でいいんだが」と、考古学者の故網干善教先生（当時、関西大学文学部教授）から、こう言われたのは、たしか平成八年の初秋だった。ご次男が、季刊誌『大和路』の編集にたずさわっていて、翌年に予定している連載記事の書き手をさがしているということであった。

一、二回ならともかく、連載などとてもかなわないと思った。まして複雑な工程、そして意匠、さらに造形性におよばなければ、まったくとりつく島もない。ややもすれば、牙を剥いてくるわけで、正直いって、あまり気乗りしなかった。さりとて無下に断るのも失礼にすぎると思い、お受けすることとなった。

ほうほうの体で八回分（二年間）の約束をはたし、これで無罪放免と想っていたところ、あにはからんや、編集部から「もう少しつづける」との声。予期せぬ事態に動転し、ためらったが、乗りかかった船と思い、今度は「大和の諸職」に踏みこみ、そのあと「伝統行事」へ分け入った。

あろうことか、いまは「街道をあぐる」が誌面を汚しているというのだから、「鶯の

古い聲」ものかわ、ちかごろは、なにやら河竹黙阿弥の歌舞伎「白浪物」気どり。はたして、「ごまめのととまじり」と嘲罵の声を仄聞する。たしかに弁天小僧菊之助ほどの見得など切れもしないのだから、はたからみれば、滑稽を通りこし、哀れをさそう三文奴。どこからともなく「だから言っただろうが、松本清張の『剥製』を読み直せって」の声が大きくなってきた。

戦後の高度経済成長のあとは、高速道路だの、河川護岸工事だの、造成だの、再開発だの、日本の美しい風景が捨て去られ、山河といわず、街といわず、村といわず、景観はすっかり様変わりし、まったくちがう表情をみせている。しかしそのじつ、街や村の「風情」も「営み」も、また「ひとの佇まい」も、それほど変わっているとは思えない。何がつなぎとめているというのであろうか。まぎれもなく、それぞれの地域に古くから伝わる祭礼や行事など、つまり、伝統文化と文化遺産が「くさび」となり、回帰と環流の磁場をつくっているからにほかならない。それこそが、人と人との、そして心と場とをつなぐ「きずな」となっている。

「街づくり」「町の活性化」「村おこし」とはいうが、それぞれの地域の伝統と歴史的な文化遺産を根っこに置かなければ、成り立つはずもないし、たちまちにして破綻する。振り返ってみると、こんなことがなければ、とても踏み入れなかつたであろうところにも足を延ばした。まだ空明けやらぬときもあれば、深夜におよんだこともあった。そ

して、じつに多くの方がたと知り合った。そして教えていただき、ご協力を賜った。まずは、そうした方がたに本書をささげたい。

『大和路』に連載するにあたっては、じつに数多くのすぐれた先行業績に導かれた。『奈良史』と『奈良市史』をはじめとする奈良県内市町村の各自自治体史、『奈良六大寺大観』『大和古寺大観』や『江戸時代人づくり風土記 奈良』、そして奈良国立博物館や奈良県立美術館、奈良県立民俗博物館発行の展覧会図録、さらに各寺院と神社が発行する寺社誌などを参考にさせていただいた。ここにそれぞれの書名と執筆者尊名の逐一をかかげないが、どうかご海容を賜りたい。

平成二十二年 初春

高橋隆博

本書の「美術工芸」「伝統諸職」「伝統行事」は、『大和路』No.四四三(平成九年四月号)から同No.四七〇(平成一五年一〇月号)に連載したもので、「近代の美術」は不定期に執筆したものである。一冊にまとめるにあたって、これらに補筆した。

なお、「近代の美術」の初出はつぎの通りである。

「明治の開封」(『太陽 正倉院と東大寺』(平凡社、一九八二年七月))

「奈良の漆芸」(原題「大和の漆芸について」(特別展図録『大和の漆芸』奈良県立美術館、一九七六年六月))

「奈良の作家たち」(『毎日なら模様』(ナラジエンヌ社、一九八六年二月〜十一月))  
「富本憲吉」

「作陶の心」(「模様」(原題「富本憲吉の作陶精神」)。『近畿文化』第三七八号・三八四号、近畿文化会、一九八二年)

「富本憲吉の灯影」(特別展図録『作陶の心 富本憲吉』朝日新聞社、一九七九年)

「新出の金銀彩初期作品」(『炎芸術』第三号、阿部出版社、一九八三年)

「心象風景」(原題「富本憲吉の風景模様」)。『陶工富本憲吉の世界―その人間と詩魂―』文化出版局一九八三年)

「米国から里帰りの金銀彩作品」(原題「富本憲吉作 赤地金銀彩羊歯模様蓋付壺」。  
奈良県立美術館「奈良県立美術館だより」第四号、一九七六年)

写真については、つぎの諸機関と個人の方がたにご提供とご協力を賜った（敬称略、順不同）。

池田含香堂、今西清兵衛商店、飯田裕康、浦西勉、大林杜壽、海藤隆吉、株式会社飛鳥園、北村昭斎、弘仁寺、興福寺、後藤親郎、古梅園、西大寺、狭川普文、正倉院事務所、辻井由紀子、東大寺、奈良県立美術館、奈良交通株式会社、富本憲吉記念館、平岡照啓、福田昭治、藤田芸香亭、法隆寺、森野旧薬園、薬師寺、薬舗菊岡、矢野建彦、矢野正善、藪中五百樹、前川敬、前川久夫、大和郡山市箱本館紺屋、山本茂雄、若松保宏

●著者紹介●

高橋隆博（たかはし たかひろ）

1945年、山形県生まれ

関西大学大学院修了

専門 美術工芸史

関西大学文学部教授・関西大学博物館長・(文学) 博士

関西大学なにわ大阪文化遺産学研究所センター長

著書『高麗李朝の螺鈿』（毎日新聞社 共著）

『韓国史跡と美術の旅』（創元社 単著）

『手箱』（駸々堂 共著）

『赤膚焼』（大和文化財団 共著）

『ゆづり葉—北村大通・人と仕事—』（北村昭斎私家版 共著）

論文「朝鮮半島漆芸史の基礎的研究」

「螺鈿牡丹唐草文の系譜—本阿弥光悦の螺鈿意匠に関連して—」

「東南アジアの漆芸」

「江南の漆芸」など、ほか多数

## 巡 歴 大和風物誌

平成22年 3月31日 発 行

著 者      たか      はし      たか      ひろ  
                 高           橋           隆           博

発行所      関 西 大 学 出 版 部

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

電 話 06(6368)1121/FAX06(6389)5162

印刷所      (株)NPCコーポレーション

〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19

©2010 Takahiro TAKAHASHI

printed in japan

ISBN 978-4-87354-485-4 C0021

落丁・乱丁はお取替えいたします。